

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	四平戯 : 福建省政和県の張姓宗族と祭祀芸能
Sub Title	Sipingxi : Fujian Province Zheng he Prefecture's Zhang Clan and public entertainment festivals
Author	野村, 伸一(Nomura, Shinichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション No.37 (2006. 9) ,p.21- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20060930-0021">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20060930-0021</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 四平戯

## ——福建省政和県の張姓宗族と祭祀芸能——

野 村 伸 一

### はじめに

福建省政和県東南部楊源村（省都福州の北約300キロ）では、毎年、春と秋の二回、英節廟会を催し、そのなかで古風な祭祀芸能四平戯を演じている。四平戯は名前だけは相応に知られているが、福建省の研究者のあいだでもまだ比較的調査研究が立ち遅れている。何よりも、近い過去にどこにどのていどの村落でこれがおこなわれていたのか、その伝承した芸能の内容や台本がどのようなものであったのかについて、基礎となる報告書が完備していない。そうした状況のもとではあるが、今回、ここに、その一端を報告することにした。日本においては第一報であろう。そのことにいささかの意義があるのではないかとおもう。



▲福建省政和県位置図

### 1.

英節廟会は同村の95%を占める張姓宗族の主宰する祭儀である。英節廟には唐末黄巢（?-884）の乱の時に殉死した張謹とその妻が一族の祖神としてまつられている。この宗族の内部には四平戯を担当する梨園会が組織されている。その構成員はすべて楊源村の住民である。この祭祀芸能は「数百年の歴史」<sup>1)</sup>を持つものとされている。

四平戯は中国内部でも福建省の研究者を除くと、まだ余り知られていない。こうしたなか、さいわい、2005年9月8日（旧8月5日）から9月10日（旧8月7日）まで、秋の英節廟会に参加して、その祭祀と芸能をみる機会を得た。それは1年に2回、村人たちがみずから進んで祖神に対して祭祀と芸能を捧げるもので、たいへん興味深いものであった。福建北部の四平戯は、明確な資料はないものの、明代の地方劇四平腔（後述）を受け継いだものとされている。つまりは四百年ほどのあいだ、村落規模の割には立派な舞台を持ち、毎年2回、少なくない負担を甘受しつつ、農民の手で芸能が維持されてきた。このことはいろいろな意味で注目すべきことだとおもう。

この宗族の祭儀には今のところ、公的機関からの支援は一切ない。費用は当番にあたつた福首らが出し合って捻出している。これは貴重な文化財とされてもしかるべきものと考える<sup>2)</sup>。しかし、現況は演じ手も資金も不足している。そのため、維持に相当な苦労をしている。外からの関心はまったくないというのが2005年までの実態である。

## 2. 楊源村と張姓の概況

政和県は省都福州から北部、三百キロほどのところに位置する。近年では北東部の都市南平を通過する高速道路があり、これをを利用して、南平、建欧、政和とクルマを走らせれば、六時間余りで到着する。しかし、政和から楊源まではさらに60キロほど山のなかにはいっていかなくてはならない。休憩などを含めると、現地入りまでに7時間はかかる。

楊源村は戸数502(536)、人口2720(2800)、そのうち張姓が95%、2530人である<sup>3)</sup>（カッコ内は2005年現地での聞書）。農業と林業が主要生業であるが、林業は伐採過多のために今は振るわず、出稼ぎ労働に頼る状況である。従って、祭祀と芸能も維持がなかなかむずかしくなっている。

楊源村の張姓は唐代に河南省から福建の閩県（現在の閩侯、福州の隣り）に移り住んだ。そして、黄巢の乱が起きた時、唐朝の招討使であった張謹は、現在の政和県鉄山の地で戦死した（887年あるいは878年）<sup>4)</sup>。そのため張謹の墓は現在も鉄山鎮にある（図版1）。父親の死後、3人いた息子たちは閩県から政和県に居を移した。そのうち、



▲図版1 政和県鉄山鎮にある張謹の墓

#### 四平戯

長男張世豪の子孫の居住したところが楊源村であった。この系統の人びとは楊源とその周辺に居住し、人口は 5540 人にのぼる<sup>5)</sup>。

### 3. 英節廟

英節廟は張謹廟ともいう。1年2回の廟会は村内で最も重要な祭儀である。政和県には古く北宋の末年に早くも英節廟が建てられていた。それは現在の鉄山鎮夏山村（図版2）（図版3）にあるもので、鉄山では今なお、英節廟会がおこなわれている。

一方、楊源村の英節廟は梁の上に残る記録によると清代康熙元（1662）年に建てられた。しかし、これは重建の記載である可能性もあり、この廟の正確な建造年はわからない。実際、廟中の木板には「始建不知何年」と記されている<sup>6)</sup>。

廟は村内の東南方に位置する（図版4）（図版5）。廟内には張謹夫妻の神像（図版6）、部下の郭栄佑とその妻の神像、張謹の伯父、また息子世豪の像などがある。そして張謹夫妻に向かい合う位置に芝居用の舞台がある（図版7）。



▲図版2 鉄山鎮夏山村の英節廟



▲図版3 夏山村英節廟内の張謹



▲図版4 楊源村英節廟遠景。正面の家型のものは橋。この地方には多い。



▲図版5 英節廟正面



▲図版6 張謹夫婦の像



▲図版7 英節廟内の舞台。



▲図版8 廟内の舞台。賜福天官、金童・玉女の図がみえる。

廟内に設けられた舞台はなかなか趣がある。この舞台は元来、廟と同時に作られたとみられる。しかし、現在のものは道光30（1850）年に重建されたものである。舞台正面の壁には賜福天官、金童・玉女が大きくえがかれている。さらに天井にも八幅の人物画がみられる（図版8）。

#### 4. 英節廟会

**迎翁会** インウォンフウイ 英節廟会は迎翁会によって担われる。この迎翁会は張姓の人びとの自発的な祭祀組織である。祭日は春が2月9日（張謹の命日）、秋が8月6日（張謹の生日）である。実際には祭日の前後の日を併せて、それぞれ3日ずつ祭祀に当てる。この組織の活動は1950年に封建迷信活動の禁止ということで中断されたが、1981年に再開された<sup>7)</sup>。ただし、祭祀内容は完全には復元できず、簡略化された。以前は「陰陽」（インヤン）とよばれる宗教

者（民間道教の担い手、後述）がきて祝頌の儀をしたが、今日はやらない。また、儒教の礼に則った行儀も今はおこなわれない。それに伴い供物も簡素化した。さらに特定の祭主も立てない。その代わりに、現今では迎翁会の責任者が祭儀の開始を宣言する<sup>8)</sup>。

**一代で 24 人**　張姓宗族には祠堂（図版 9）の理事会が別にあるが、それを除くと迎翁会が最も重要な宗族組織といえる。迎翁会は五代が一組となって機能する。一代は村内を 4 グループ（房）に分け、各房から 6 人ずつ、計 24 人の福首を選んで組織する。五代のうち、もっとも新しい代が祭儀の代表となる。そして、廟会のたびに新しい代が産み出されてくり上がっていく。つまり 1 年に 2 代が生じる。以前はすべて張姓の者が担ったが、近年は外姓の人も参加する<sup>9)</sup>。

**迎翁会の活動**　英節廟にはかつては廟田があり、廟の管理、祭儀の費用に当てた。しかし、50 年代初めに土地改革がおこなわれ、その際、政府により土地は没収され零細民に分与された。以後は、迎翁会の 24 人の福首がこれをまかなうことになった。1981 年の再興時の福首一人当たりの負担は現金 10 元と米 20 斤であった。そして、2000 年頃の調査では、現金 30 元、米 20 斤とのことであったが、2005 年に筆者が現地で聞いたところでは、24 人のメンバーはそれぞれ 150 元負担するという。この費用で祭儀中の食事<sup>10)</sup>を含めて、祭祀の一切をまかぬ。とくに追加の負担はないというが、農民の現状では小さくはない金額である。

迎翁会の活動は廟会の一ヶ月前からはじまる。その会合では経費、食事、供物、使用道具、掃除の手はずなどについて話し合う。ほとんど全員が何らかの仕事を分担する。仕事の関係などでどうしても迎翁会に参与できないばあいは現金で埋め合わせをする。村外に住む一族が廟会に合わせてやってくる時は寄付金があり、これは迎翁会の収入になる。

**廟会の次第**　廟会の次第は、先にも記したとおり、今は僧や道士の参加がないので簡単である。ただし、英節廟から村外 1 里（500m）のところにある広惠宮への神輿の行列は古式に従ってやっている。儀隊は次の順に行進する（図版 10）（図版 11）（図版 12）。

- (1) 神銃
- (2) 諸子牌、神器
- (3) 舞獅鼓樂
- (4) 涼傘旌旗
- (5) 神祖轎
- (6) 鼓吹
- (7) 鐘鼓隊
- (8) 信衆



▲図版 9 村内にある祠堂



▲図版 10 遇翁会の人びとによる行列。



▲図版 11 神輿の先頭は張謹の部下郭栄佑を載せたもの



▲図版 12 广恵宮に到着した神輿を迎える。

これは張謹の出戦のさまを模したものだという。また、広恵宮のなかの神像の前で四平戯の一部を演唱する（ここでは演戯はおこなわない）（図版 13）。広恵宮は英節廟に付属する小廟である。神輿の臨時のお旅所<sup>たびしょ</sup>のような施設である。なかには何もない。ここからの帰りは、旌旗が先頭に立ち、そのあとから神錠などが従う（図版 14）（図版 15）。遇翁会の一行は五代のメンバーが全員参加するので、なかなか盛大である。

**村人の参与** ところで、彼らが行進する時、各家ではこれを迎えて爆竹を鳴らす。ただし、供物は置かない。またこの祭祀の3日間、廟内では中年以上の女性たちが「経樹」を奉納する。すなわち彼女らは「弥陀経」を唱えながら、黄色の紙（または水紅の紙）をよじって七層の塔状のもの（経樹）をこしらえる。祭儀がすべて終わる日（2月10日、8月8日）の夜、婦人たちはこれを祖神に献上して一家の保護、平安を祈念する（図版 16)<sup>11)</sup>。

**封廟** 廟会後、一週間は英節廟の門は閉ざされる（封廟）。村内の家や家畜が平安であれば神祖（張謹）は廟会に満足しているとする。しかし、村内に不安なことが生じると、陰陽先生<sup>12)</sup>をよんで祓いの儀をする。ただし、英節廟内では道教の法事ができないので、他の寺廟で清醮をやる。この法事後、英節廟にいって占いをし、良い結果が出れば安心する。

#### 四平戯



▲図版 13 広恵宮では演唱だけをする。



▲図版 14 広恵宮からの帰還



▲図版 15 村内をいくとき猛烈な爆竹の歓迎を受ける。



▲図版 16 行列が帰還したあと、婦人たちが恭しく拝礼する。

一方、この三日間の祭儀のあいだに、梨園会により四平戯がおこなわれる。

#### 5. 梨園会と四平戯

明確な記録はないが、梨園会は「明代の戯曲社会と芸術文化の風貌」を比較的多く保持してきたものとみられる。それは宗族の祖神に演戯を捧げるための組織として機能してきた。人びとは自分の子供が神前で演戯することを光栄におもい、奨励してきた。

しかし、生活形態が変化し、今日では梨園会員であることは負担として感じられている。とはいえ、宗族の成員として生活しなければならないという制約があり、これにより年2回の芸能の上演は何とか維持されている<sup>13)</sup>。

**梨園会の活動** 梨園会の活動は廟会だけではない。梨園会は誕生日や結婚式の祝賀、その他宗族の公益事業にも奉仕する。現在、梨園会は業余劇団とみなされている。そのため、責任者（現在、張孝友氏、1951年生）は団長とよばれるが、元来は「戯頭」とか「戯首」とよばれた。団長は長老にして演技力にたけ、衆望の集まる人がなった<sup>14)</sup>。

1981年に復活してからの梨園会の指導者は張陳炤氏であったが、1990年に張李温氏に交替した。しかし、家庭の事情などから1994年には交替した。現在は張陳炤氏の長子の張孝友氏が継いでいる。年2回の演戲のほかに衣装や台本の管理などもあり、団長の職責を勤めるのはなかなかたいへんなようである。

楊源村の張姓の者は誰でも梨園会の会員になり、演じることができる。このことは四平戯の特徴であり、福建省内でもたいへんめずらしいものだという。また子供たちを舞台の脇の席に座らせて観劇させたり、端役として演戯させたりするのも特徴のひとつである。楊源村ではこうして子供たちを芝居に慣れさせてきた<sup>15)</sup>。

**梨園会の規範** 梨園会では祭儀の3日前に集まりを持ち、役柄を決める。選ばれた者が参加できない時はその埋め合わせに費用を負担した。ただし、主役級の不参加は、宗族の憤りを買うことになる。その代償はたいへん大きいので、以前は不参加はほとんどなかった。こうした規範は今もやはり残っている。とはいえ、梨園会からの退会は不可能ではない。退会の「自願書」を書くことで正式に申し出ることができる<sup>16)</sup>。

**四平戯の歴史** 福建の四平戯は、明代の南京で起こった四平腔を引き継ぐものとされている。四平腔は江南各地で盛んにおこなわれた弋陽腔イーヤンチヤンのうちのひとつである。それは福建北部の農村に流傳してから久しい時が経つ。ただし、福建における発生年代は研究が遅れていてまだ明確ではない。

四平腔については次のような明代の資料が知られている。

これによれば、16世紀、明代の南都（南京）では南戯がおこなわれた。はじめは弋陽腔、海塩腔のふたつがおこなわれたが、のちには弋陽腔のいくらか変容したものとして四平腔が受容されたということが知られる。そして、近年の研究によると、明末清初に福建省屏南県<sup>ピンナン</sup>龍潭村<sup>ロクタン</sup>の陳志顥、陳志現兄弟が四平戯を習い、さらに、その子供たちに教えたという。そして、屏南の四平戯がさらに寧徳、莆田、霞浦など（前掲略図参照）に広まったという記録が発見されている<sup>18)</sup>。

**四平傀儡戯の伝承** 屏南県竜潭村の周辺には四平戯だけでなく四平傀儡戯を伝える村が相当数ある。たとえば政和県や寧德県下の各地の村がそうである。また屏南県だけでも、

## 四平戯

屏 城郷の南湾 ナンワン ルーデイ 屏 城郷の南湾 ナンワン ルーデイ  
陸地あるいは熙嶺郷の山 シーリン シャンドゥン 陸地あるいは熙嶺郷の山 シーリン シャンドゥン  
墩 村などに分布する。そうしたことを踏まえると、四平傀儡戯は「明清時期には屏南および閩東北の山村には広く流行した」ということができる<sup>19)</sup>。

**政和県の四平戯概観** 政和県の四平戯は楊源一帯を中心であった。そこでは、清代の康熙（1662–1722）、雍正（1723–1735）の時期に一度さかんになったことが知られている。当時の戯班は半ば専門的で、配役も「生、旦、淨、末、丑、貼、外、夫、礼」の9種類に分かれていた。そして、雍正中期に、この戯班は、周寧県、寿寧県などの周辺地域に招かれてでかけていき、半月以上演戯をおこなった。演目は『白兎記』、『劉文錫沈香破洞』[後述『上華山』参照]、『八卦図』、『青銅棍』、『蘇秦』、『蘆林会』などであった。以後、衰退、復活をくり返した。そのうち、とくに同治年間（1862–74）に中興された演戯のかたちが今日まで伝承されている。なお清代の光緒年間（1875–1908）には、政和県の楊源、禾洋、岑頭の三箇所に四平戯班があり最盛期を迎えた。しかし、民国時代には国民党的攻撃により四平戯は廃れていった。新中国の体制下では楊源と禾洋で四平戯業余劇団が維持されている。文革中は活動が停止されたが、1982 [1981?] 年から再開されている<sup>20)</sup>。

**四平腔の曲調** 戲陽腔の系統の曲調をのちに高腔とよぶにいたるが、四平腔はその高腔のひとつである。ただし、清代中葉以降、南方では花部と総称されるより現代的な曲調がはやり、とりわけ乱彈腔の強い影響を受けた。そのため、四平腔の曲は徐々に失われていき、現在知られている曲は少ない。しかし、1980年代以降、研究がおこなわれ、竜潭村では清代の残巻『全十義』から49の曲が回復された<sup>21)</sup>。

歌い方では、四平腔〔戯〕はことばが多くて音が少ないとされる（字多音少）。また一人が口を開くと数人の者がそのあとを継いで歌う<sup>22)</sup>。伴奏には元来、管弦を用いず、銅鑼、太鼓を用いた。現今の四平戯は銅鑼、太鼓、鉦（シンバル状のもの）、チャルメラなどを用いている<sup>23)</sup>。

## 6. 2005年秋の四平戯

**演目** 四平戯の演目は歴史的にみて前期、後期の二種類に大別される。前期のものは四平腔の伝統劇に属するものである。多くは宋元の南戯および明代の传奇に関連している。一方、後期のものは清代の花部における乱弹戯を混ぜたものである。

このうち前期の代表的なものとしては次の演目があげられる。これらは唱官腔（南昌官話系統）を主としていて、俗称は「唱正字」である。また、それにちなんで

「正字戯」ともよばれる。

『王十朋』(『荊釵記』), 『蔡伯喈』(『琵琶記』), 『劉智遠』(『白兎記』), 『蘇秦』(『金印記』), 『劉文錫』(『宝帶記』), 『壳花記』, 『姜詩』(『躍鯉記』), 『梁山伯』, 『九竜記』(『青銅棍』), 『八卦図』, 『二度梅』, 『秦世美』(『続琵琶』), 『九竜閣』(『楊六郎』), 『花閨索』(『英雄牌』)など<sup>24)</sup>。

**2005年秋の事例** 2005年秋の四平戯は次のように演じられた。このうち、多くは時間の関係で物語のさわりの箇所を演じるもの、すなわち折子戯であった。ただし、初日の『白兎記』, 2日目の『上華山』, 3日目の『張文成案』『玄武闕』は部分的には簡略にしつつも、一通り演じられた。

#### 第1日 2005年9月8日（旧8月5日）

午前中は行事がなく、午後2時半過ぎに四平戯がはじまる。本日から三日間、基本的に午後の時間に村人による奉納芝居が演じられる。演目は三日間で14種目あった。大半はよく知られている芝居のさわりの部分を演じるものである。観ている人びとは物語の内容はわかっているので、これで十分なのであろう。

##### 1. 八仙（開台戯）

八仙（呂洞賓, 漢鐘離, 張果老, 韓湘子, 李鐵拐, 曹国舅, 藍采和, 何仙姑）登場。また跳魁星（魁星に托して文章で名を挙げることの予祝）、加冠進禄などの慶祝の演戯がある。跳魁星では仮面をつけて飛び跳ねる演戯をみせる（図版17）（図版18）（図版19）。

##### 2. 蘇秦奏主（折子戯）

蘇秦はよく謀を巡らせて秦を破り、魏の丞相となる。そして故郷に帰り、父母、叔父、兄嫁、妻たちに報いる。すなわち立身功名後に故郷に錦を飾る。この演目は宗族の最終的目標を表現している。明代のいわゆる「榮会類」に属するものである<sup>25)</sup>。

##### 3. 聰芳（折子戯）

老母と妻のいるところに、科挙に合格し



▲図版17 八仙と魁星

#### 四平戯



▲図版 18 魁星の跳舞



▲図版 19 加冠進禄などの慶祝の演戲

た息子が帰ってきて対面する。この一家では、その兄もまたすでに科挙に合格していて喜びが重なる。すなわち聯芳（連なる喜び）である。慶祝の場面を演じるもので、明代のいわゆる「頌類」<sup>26)</sup>。

#### 4. 姚江下山（折子戯）

姚江は父親を暗愚の王に殺された。そこへ、王音がきて謀反の戦を起こすことを告げる。すると、姚江はこれを軍紀違反として処罰する。しかし、姚玉妹らの訴えもあり、姚江はついに兵士とともに事を起こし、下山するに至る（図版 20）。明清戯曲『英雄会』の一部。条理にかなわぬ状況のもとでは王に対する謀反も正統化される。この倫理観は興味深い。地方宗族のもとではこうした物語も許されていた。

#### 5. 白兎記（全本）

夕食後、2時間余りの上演。

李員外は馬面王廟にいって劉智遠に会う。そして劉智遠は見込まれて李三娘と結婚する（図版 21）。ところが、李員外が病死して、状況が変わる。劉智遠は李三娘の叔父の李洪



▲図版 20 姚江下山。姚江は王音らの意を受けいれ、従軍の決意をする。義が強調される。



▲図版 21 白兎記。劉智遠と李三娘との結婚の儀。赤い布を引き合うのが結婚の印となる。



▲図版 22 生まれた子を抱く李三娘



▲図版 23 太白仙翁が赤子を救う。

信に離婚を迫られる。

劉智遠は離婚はせず、他郷に兵士として出征する。一方、李洪信は李員外の残した財産をねらって、李三娘に改嫁を勧めるが、断られる。すると、李三娘を石臼小屋にとじこめる。李三娘はそこで劉士郎を産む（図版 22）。

李洪信はこの赤子を池に捨てさせる。しかし、太白仙翁が赤子を救う（図版 23）。そして、父親のもとにいかせる。父親である劉智遠は兎が泣くのを見て、子供がいるのを見つける。劉士郎はそのまま父のもとで育てられ成長する。

ある時、劉士郎は兎を追って（図版 24）、偶然、母のいる小屋にいき、はじめて母に対面する（図版 25）。劉士郎は母からの手紙を携え、一旦、別れて父親のもとにいく。そして、劉士郎は兵を率いて開元寺で母の無事を祈る。やがて母のいるところにやってきて、

母子は再会する（図版 26）。

一方、劉智遠は出世して、李洪信の前に現れる。李洪信は処罰を受け財産を没収される。

初日の晩、2時間ほど、『白鬼記』では物語の内容が一通り演じられた。最後の母子再会の場面に向けて、団長以下、それなりの熱演でなかなか見応えがあった。母子の対面が二度にわたってあること、また息子が、囚われの身の母を探し求めてやってくること、そ



▲図版 24 兎を追う劉士郎

#### 四平戯



▲図版 25 石臼小屋での母と子の対面



▲図版 26 母と息子の再会。女性たちにとつて、最も期待される場面。

して二度目の対面から団円に至るところなどは宋元以来の目連戯の構図を踏まえているといえよう。

そして、おもしろいことに、この母子再会の構図は翌日、もう一度みることになった。

#### 第2日 9月9日（旧8月6日）

午前中は迎翁会の人員百人ほどにより広恵宮まで行列がなされる。午前8時頃、一行は廟を出て、広恵宮に赴く（図版27）（前掲図版12, 13も参照）。到着後、間もなく、この小祠のなかで四平戯のうちいくつかを演唱する（今回は『偷桃献寿』『呂蒙正』『張公義』）。そして、午前10時半頃、英節廟に戻る。行きも帰りも爆竹で祝福される。神輿が英節廟



▲図版 27 広恵宮内に置かれた神像。左から郭栄佑夫妻、張謹の外甥、張八婆、張八公。

に帰還し、廟内にはいる瞬間神輿の担ぎ手たちが勢いよく走り込む（図版28）。この光景は神がみの力を示すものなのだろう。興味深かった。また、祖神らがすべて安置されると、村の女性たちが神がみに向けて改めて祈りを捧げる（前掲図版16）。

昼食後、2時過ぎから四平戯がはじまる。

#### 6. 東方朔偷桃（開台戯）

2日目のはじめは東方朔が桃を偷む（図版



▲図版 28 神輿が廟内にはいる時は勢いよく駆け込む。



▲図版 29 東方朔偷桃。



▲図版 30 西王母、東王公と八仙



▲図版 31 跳魁星

29)。そして西王母の誕生日にこれを献上して長寿をことほぐ。西王母、東王公の見守るなかで、前日と同様、八仙が現れる（図版 30）。そして跳魁星（図版 31）、加冠進祿の慶祝の演戯がくり返される。村人にとって、こうした祝福の演劇はくり返しみるべきものようである。

## 7. 轄門斬子（折子戯）

1時間余りの折子戯。宋と遼の争いのなか、楊延昭は息子の楊六郎（宗保）を出陣させる。ところが、敵の女将軍穆桂英により敗戦を強いられ、楊宗保はやむなく穆桂英と結婚をするに至る。その後、楊六郎は宋の陣営に戻る。しかし、父の楊延昭は息子六郎が敵

#### 四平戯



▲図版 32 楊宗保を救いにきた遼の女将穆桂英。この女将は後世の戯曲でも頻繁に登場する。



▲図版 33 穆桂英と武将孟良との立ち回り

将と通じるという軍律違反を犯したことを理由に、轅門（役所の門）において、息子を斬罪に処するように指示する。

そこに穆桂英が現れる。そして楊延昭の部下を力でねじ伏せ、楊六郎を救出する（図版32）。こののち女将穆桂英と武将孟良との立ち回りが舞台一杯に演じられる（図版33）。

なお、穆桂英に象徴される女の武将の活躍がこののちの演戯にもしばしばみられた。観客の多くが女性ということとも関係しているのかもしれない。

#### 8. 上華山（全本）

劉文錫は科挙に応じるために上京する。一方、華山では二郎神と妹の三仙娘が対話をする。二郎神は妹に南天門前の香炉を守るのは三仙娘の仕事だという。その華山の大殿に劉文錫がやってくる。そして科挙合格を祈願する。この辺の演戯は滑稽に進められる。

ここで三仙娘は劉文錫と出会い、求婚し夫婦となる。神の身でありながら、三仙娘は劉文錫の子をみごもる。しかし、二郎神は妹が人間と結婚したことを咎めて首枷をはめる（図版34）。そして、洞窟に閉じこめてしまう。仙娘は洞窟で息子を産む。これが劉沈香である。赤子の沈香は土地神に助けられる（図版35）。そして父のところへいく。

劉沈香は八仙の一人である李鉄拐から力を授かり、母のいる黒風洞に向かう。途中、水林洞で二郎神や孫悟空と戦う（図版36）。そして、李鉄拐の授けた火胡炉を用いて敵を下す。このうちに、劉沈香は母の救出を



▲図版 34 兄の二郎神に咎められ首枷をはめられる妹の三仙娘。



▲図版 35 赤子の沈香は土地神に助けられる。



▲図版 36 劉沈香、孫悟空と戦う。



▲図版 37 母を求めての開洞は七回くり返される。



▲図版 38 劉沈香と母三仙娘の出会い。

こころみる。だが、洞窟の門を開けてもすぐには再会ができない。劉沈香は開洞を7回もくり返す（図版37）。そしてようやく母に再会し（図版38）、母と子は揚州に向かう。そこには劉文錫がいて、親子は団円を遂げる。

以上の演戯のうち、母を救出して再会を喜ぶ場面は『白兎記』にもあった。『白兎記』の箇所でも述べたように、そこには目連救母の心象がある。<sup>イメージ</sup>実際、『上華山』の、劉沈香は、現地の台本によると「好似目連救母上西天（まるで、目連が母を救うために西天に向かうのかのように）」と表現されている。しかも、この時、破洞と母の追跡を7回くり返す。これは、目連救母における目連の破獄の構図そのものである。なお、この物語『上華山』は『宝蓮灯』という名でより多く知られている。

ところで、2日目の晩の上演は禾洋村の人びとによるものであった。禾洋村は、楊源村から13キロほどのところにある。禾洋村では、毎年、旧暦の7月24日から26日まで自

## 四平戯

分たちの手で四平戯を演じている。以前は独自の舞台があったが、現在は公民館に当たる建物のなかでおこなっている。禾洋村の四平戯は政和県内では一部の人に知られているものの、外部にはほとんど知られていない。

今回の禾洋村の人びとによる上演は、政和県在住の熊 源 泉 氏の依頼に応じて特別になされたもので、毎年このような上演がみられるわけではない。また、『上華山』をはじめる直前には慶祝劇『八仙』が演じられた。八仙の演戯は、この日の午前中にもおこなわれていたが、戯班が交替したので、再度、儀礼的におこなわれたのである。

### 第3日 9月10日（旧8月7日）

3日目の朝は9時半頃から「張文成案」を、また午後は3時過ぎから「張公儀」以下を上演する。廟内の壁には、早くも来年春（2006年）の廟会のための人員表「二〇〇六年游迎縁首名单」が張り出されている。

#### 9. 張文成案（全本）

九龍山の孫竜、孫虎という強盗が力づくで彭員外のむすめを嫁にすることにする。彭員外はむすめの秀英をよんで、別れの酒を飲む。そこへ旅の途にある張文と従者血雷がやってきて、食をふるまわれる。張文は員外と秀英の窮境を知り、自分たちが秀英らに変装（女装）することを提案し、山の砦にいく。血雷は孫竜に対して、結婚したからには、3回殴り、1回蹴飛ばすことが子供を産むのに必要だなどといいくるめて接近する。やがて張文、血雷は武術の力を発揮して孫竜、孫虎を征伐する。最後に張文と彭秀英は結ばれる（図版39）。

外からやってきた勇者が助けた当のむすめと結ばれるというのはスサノオの八岐大蛇退治のような話である。ただし、この物語の秀英は相当に活発なむすめであり、刀を持って張文らに助力もしている（図版40）。ここでも勇壮な女性の登場が演出されている。また、勇者が女装して敵に近づくという趣向はなかなか好まれていたようである。物語は一通り演じられた。

#### 10. 張公義（折子戯）

張公義は老成した官僚である。登場して、



▲図版39 張文成案。山賊を倒して彭秀英（中）と結ばれる張文（右）。



▲図版 40 彭秀英は戦うむすめである。  
のだろう。

### 11. 尋箭（折子戯）

趙匡義は君王の命令により弓を射る業をみがく。ある日、鴛鴦を射るが、鴛鴦はどこへか飛び去ってしまう。趙匡義は従者に命じて探させる。ともに探し求めていくうちに、花園に至る。するとそこには金連という名のむすめがいる。金連は昨晩の夢に王竜が飛んできて身の上に止まつたことを告げる。そして、趙匡義に礼物として金の簪を渡して結婚を迫る。趙匡義はこれを受け取り、みずからは指を切って礼物とする。

ここでは閨秀の若い女性が初対面の男に結婚を迫る。先にも三仙娘が劉文錫に結婚を申し込むという演戯があった。こうした行為は宗族の倫理からみると、感心できないものであり、現実には許されないことであろう。とはいえ、実際はこうした芝居は女性たちに人気があったのだろう。あるいは福建省の庶民のあいだの長い伝統としてそうした現実があったのかもしれない。

### 12. 挂牌大戦（折子戯）

包三娘は生来の女丈夫である。場面は父王の慶誕の日である。包三娘は父に命じられて関所の門に大牌（立て札）を掛けておく。そこへ花閻索がやってきて、これを打ち破る。二人は対面し、ことばを交わすうちに、互いに相手に惹かれる。しかし、包三娘は花閻索に戦いを挑み、両者は立ち回りを演じる（図版 41）。だが、なかなか決着はつかない。実は花閻索は上界神君であり、包三娘は海の金竜なのであった。

▲図版 41 挂牌大戦。女丈夫包三娘と勇者花閻索との大立ち回り。



みずからの感懐を公言する。それは忠臣として君主に仕え、子孫には忍耐をもって立身出世することを促し、親戚朋友には忍をもって末永く往来するというもので、宗族好みの倫理の表明である。また張公義の夫人も登場して、孫たちの栄達を夫に報告する。こうした台詞には演劇性はほとんどないが、必ず上演しなければならないものなのだろう。

ちなみに、江西省万載県潭埠村の追儺舞

## 四平戯



▲図版 42 彭子求寿。99歳の彭子が山中の八仙のもとを訪れ、栄華富貴万年を約束される。



▲図版 43 玄武闘。西遼の女將軍才月娥（左）は唐軍にとって強敵である。



▲図版 44 唐軍の秦漢と西遼の才月娥は和平を結ぶ。

踏（仮面戯）のなかにも「鮑三娘・花闘索」がある<sup>27)</sup>。これもやはり男女の勇者が大立ち回りを演じるものである。

### 13. 彭子求寿（折子戯）

齡九十九の彭子が登場する。彭子は八仙が山中で将棋に興じるのを夢にみる。そこで巖山に向かう。そして八仙に出会い、来意を告げる。いわく、みずから壽命を延ばし、子の数を増やし、子の出仕の機会を増やしてもらいたいと。何とも虫のいい願いだが、八仙はすべて聞き入れてやる。ただし、その最後に、「彭子」という名前がよくないので「栄華富貴万年」と改めよという（図版42）。慶祝の折子戯である。

### 14. 玄武闘（全本）

薛仁貴征西に関連する活劇である。玄武闘での戦いの時のこと、西遼の女將軍才月娥は法宝、迷魂鈴をもって戦い、唐軍を大破する（図版43）。そのため唐將の秦漢は師匠の王鰲老子に助けを乞う。この王鰲老子の妹には金刀聖母がいる。そして、その弟子がまさに才月娥であった。そこで、王鰲老子と金刀聖母の老仙は争いをやめさせるべく、下山して

戦場に赴く。そして、秦漢と才月娥の二人は前世において結ばれていたのだから、戦う必要はないのだと言明する。そうして玄武闘の門を開けさせ、唐将秦漢が玄武闘にはいることになる。

女將軍の活劇あり、神話風の筋の展開あり、そうして最後は敵味方の和睦、結婚というかたちで泰平を実現する。最後に王鰲老子を中心にして、その左右に敵味方が勢揃いするかたちがみられる（図版44）。この調和こそは宗族の期待の表れなのであろう。

三日目の晩、『玄武闘』は2時間半ほどの上演。このあと夜食をとって三日間の祭祀芸能は終わった。

### 楊源村四平戯の特色

三日間の四平戯をみて特色とおもわれた点は次のとおりである。

1. 楊源村の四平戯は、千年前に殉死した祖先張謹を記念した祭儀、英節廟会においておこなわれるものである。従って、演目選定には宗族の意向が反映される。もちろん、演目は話し合って決めるので、年ごとに多少の変動はある。しかし、全般的にみたばあい、その性格は一定しているとみてよいであろう。
2. 「八仙」に代表される慶祝の演戯が反復される。たとえば『八仙』、『東方朔偷桃』、『蘇秦奏主』『彭子求寿』。
3. 宗族の維持に不可欠な倫理が直接的に演じられる。『張公義』。
4. 一方で、英雄的な行為、活劇風の演戯が随所にはさまれる。『姚江下山』、『挂牌大戦』、『張文成案』、『玄武闘』。
5. 観客のうちの女性たちの支持が集まるような演戯が効果的にはさまれる。目連救母を連想させる場面や女の將軍の立ち回りの場面などもこれに含まれるだろう。『白兎記』や『上華山』の母子再会、『楊六郎斬子』の穆桂英の立ち回り、『尋箭』における金連の積極的な求婚、『挂牌大戦』の包三娘および『玄武闘』の才月娥などの勇姿。これらは宗族の祭祀演劇のなかにあとからはいりこんでいったものであろう。しかし、実際の上演時間みると、これらが長く演じられる。いかに好まれていたかがわかる。
6. 以上のことから、四平戯は必ずしも宗族の体制維持のためだけに演じられるものではないといえるだろう。なおいと、各種演目のなかでみられる滑稽性もまた重要な特徴かも知れない。

## 補論 民間祭祀の復興

## 1. 陰陽先生の傀儡戯

今日の四平戯の世界は祭祀性がかなり弱くなっている。先にも述べたように、かつては陰陽先生の参加があったが、今日では、みられなくなった。ただ、楊源村の近く、桃洋村には現職の陰陽先生がいて、傀儡戯や廟会、個人祈祷などを引き受けてさかんに活動している。

四平戯が終った翌日、2005年9月11日に、わたしは陰陽先生宅を訪問し、祭祀方面の日常活動について話を伺った。主人は張林活氏（68歳）で、弟の張森声、張常興氏といっしょに傀儡四平戯をやっている。その時の聞書によると、来歴および主要な活動は次のようである。

張氏の家では代々傀儡を演じていて、現在で八代、およそ二百年ほどになる。家のなか、正庁（広間）の壁に神堂が設けてあり、そこに戯神として「天王」をまつっている（図版45）（図版46）。傀儡戯の上演は音楽をやる者3人、操りが1人でやる。傀儡戯の依頼は諸方からくる。その大半は、家庭の平安、健康問題に関連して祈願をし、そのうち所願成就した時に願ほどき（還願）としてやるものである。経費は1回50元ほどである。

ちなみに、陰陽先生は還願の前提となる増福、延寿の祈願も担当する。また神の慶誕の儀の一環として傀儡戯を演じることもある。



▲図版45 桃洋村張氏宅の神堂。中央下は 戯神「天王」。



▲図版46 天王

## 2. 鉄坑廟祭儀の復興

張氏宅を訪問した際、弟にあたる人は不在で、話がきけなかった。ところが、9月13日に、楊源村から4キロほどのところにある鉄坑廟で次男の張森声氏（58歳）に会うことになった。この日は同時に、廃れていた廟会の復興の日でもあり、張氏の行儀ともども興味深いものがあった。

鉄坑廟（別称、臨水宮）は福州閩山派道教のまつる陳靖姑の義妹「李三夫人」、俗称「李大奶奶」をまつっている（図版47）。建物の概観は現在、少し朽ちた状態である。だいぶ長いこと祭祀がおこなわれていなかつたことをものがたる。なかにはいると、中央の室内に臨水夫人と通称される三夫人（左李三娘、中央陳靖姑、右林九娘）がまつられている。またその右隣の部屋にも三夫人がまつられている（図版48）（図版49）。鉄坑廟は福建東北部で広くまつられる李夫人の祖廟といわれていて、かつてはさかんに祭祀をおこなって



▲図版47 鉄坑廟（臨水宮）は三女神をまつる。周囲に民家はない。現在、復興の気運がある。



▲図版48 鉄坑廟内、中央は陳靖姑。



▲図版49 右脇の部屋に安置された三夫人。

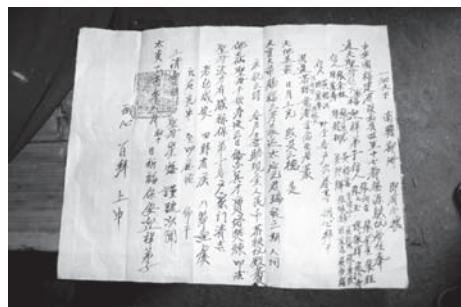


▲図版50 参拝にきた婦人たち。こうした女性たちが廟や寺の復興を推し進めている。

#### 四平戯



▲図版 51 隕陽先生が女性たちのために疏文を読み上げる。



▲図版 52 疏文



▲図版 53 隕陽先生による閻山教の行儀。神がみへ祭儀の挙行を通知する。



▲図版 54 閻山教の行儀、手印を結び厄除け。



▲図版 55 個人の祈願に応じる隕陽先生。

いた。かつては正月十五日になると、遠近から参拝客と道士が集まり、政和県内では最も影響力のある祠廟のひとつであったという<sup>28)</sup>。

周囲には民家がなく、まさに孤廟である。伝説によると、かつて、この付近に妖怪魑魅が現れたが、三夫人が滅ぼして人びとは安寧を得た。その後、ここに廟を建てることになったという。廟内には狭いながらも戯台があった。相応の芸能が演じられたものとみら

れる。

ところで、今回の祭儀はこの廟の祭儀が滞っていることを気に掛けた婦人たちが中心となって、桃洋村の陰陽先生に働きかけ、実現した。9月13日も婦人たちが集団をなしてやってきていた（図版50）。その連名の疏文をみると、婦人たちは李夫人を「通天聖母」とよんで称えている（図版51）（図版52）。廟内には午前中からかなりの数の婦人たちが集まり、併せると百人近くにはなる。

張氏は10時少し前から40分ほどかけて、閻山教の祭儀をおこなった（図版53）（図版54）。そして、それが終わると、個人祈願に応じた。いくつかの組があり、陰陽先生はそれぞれに対して同じ手順の儀礼をくり返す。集団でやってきた人たちのなかから、何人かは、自分なりの相談事を告げ、その祈願を込めていた（図版55）。こうして、鉄坑廟の祭儀はかつてと同じように賑わいを取り戻していくのだろうとおもわれた。

付記 本論は、2005年度科学研究費補助（研究課題「東アジア祭祀芸能史論の構築」）による現地研究の一部を公開するものです。

## 註

- 1) 葉明生・熊源泉「政和県楊原村英節廟会与梨園会之四平戯」『民俗曲芸』第122、123期、財団法人施合鄭民俗文化基金会、2000年、191頁。楊源村の四平戯については、この文献に基本的な紹介、解説がある。四平戯一般の記述はほかにもあるが、楊源村の四平戯に関して公刊されたものとしては、これがおそらく唯一のものであろう。
- 2) ちなみに、福建省芸術研究所と屏南県政府は、2006年10月、内外の研究者を募って「中国四平腔学術研討会」を開催することにした。
- 3) 同上、192–193頁。この数字は2000年頃のものである。人口は増加傾向にあることがわかる。
- 4) その死去の年は族譜『楊源張氏族譜』（1982年重修版）によれば僖宗丁未（887）年であるが、福建省での戦闘は史実としては878年である（同上、201頁）。
- 5) 同上、194頁。
- 6) 同上、203頁。
- 7) 同上、205頁。
- 8) 同上、213頁。
- 9) 同上、205頁。
- 10) 食事当番は8戸で当たる。それぞれが3碗、都合24碗を準備する。三日間、廟内で夜食を提供する（同上、208頁）。
- 11) 同上、215頁。
- 12) 陰陽先生は民間道教の担い手。現在も近在の桃洋村にいて盛んに活動している。それについては後述する。

#### 四平戯

- 13) 前引、葉明生・熊源泉「政和県楊原村英節廟会与梨園会之四平戯」、216-217 頁。
- 14) 同上、219 頁。
- 15) 同上、220 頁。
- 16) そこには「因無能，不能達到參加子弟班，本人自願退出子弟班」などと記されている。子弟班とは梨園会のことである。同上、221 頁。
- 17) 同上、229 頁。[] 内は野村による。以下同。
- 18) 葉明生「福建四平戯与四平腔関係考」王評章・葉明生主編『福建芸術理論文集』、中国戯劇出版社、2005 年、19-20 頁。
- 19) 同上、21 頁。
- 20) 政和県地方志編纂委員会編『政和県志』、中華書局、1994 年、667-668 頁。
- 21) 前引、葉明生「福建四平戯与四平腔関係考」王評章・葉明生主編『福建芸術理論文集』、28-29 頁。
- 22) ちなみにこうした歌い方は朝鮮半島の民謡にもある。「カンガンスウォルレ」や「クウエチナチンチナネ」などがそれである。
- 23) 前引、葉明生・熊源泉「政和県楊原村英節廟会与梨園会之四平戯」、229-230 頁。
- 24) 同上、231 頁。なお、下線を付したものは 2005 年、楊源村で実見した。
- 25) 田仲一成『明清の戯曲』、創文社、2000 年、335 頁。
- 26) 同上、234-235 頁。
- 27) 田仲一成『中国演劇史』、東京大学出版会、1998 年、72-73 頁。
- 28) 前引、葉明生・熊源泉「政和県楊原村英節廟会与梨園会之四平戯」、194-195 頁。